

トップシークレット

以下の文書は、ミナ・リャオ博士がテロリストの襲撃により命を落とした後、彼女のラボから回収されたものである。本文書には「エコー・プロジェクト」（機密レベル7）の部分的な記録が含まれる。言うまでもなく、この資料は必ず最高機密として扱うこと。



音声メモ

エントリー：10072.7.25.1237



私はここ数年間、オーバーウォッチと協力してロボティクス計画に参加し、順応的に学習する新世代の人工知能開発に取り組んできた。目的は、オムニカ・コープのオーロラ計画に匹敵するレベルの性能を持つ洗練されたAIを開発すること。かの計画の条件を再現するため、何百回も試行を繰り返したものの、すべて失敗に終わった。科学的な根拠は割愛するとして、私は広く知られ研究しつくされたオーロラの画期的な現象は、再現不能であるとの結論に至った。

それに、オーロラ以降の数十年で国連は厳格な規制をかけ、「新生の自意識」を創造しうる条件を最小化ないし排除する方向に動いている。こうした状況下で研究を順調に進めることは……針に糸を通すようなものね。とはいえ、この分野の歴史における自分の立ち位置を踏まえると、こういった規制が果たす役割も十分理解できるけれど。

そこで、私はアプローチを変えることにした。次世代AIを開発し、初期モデルから現行モデルまで、段階的に複雑化していくロボットのボディに組み込む。最新モデルはボディの一部に硬質光を採用したことで、あらゆる形状に変化できる。制約となるのは自身の質量と機能的な知識だけ。つまり、状況に応じて臨機応変に体を変化させることができるようになった。言うまでもなく、これには社会面でも軍事面でも大きな影響が予想される。

今日まで私はこの新たなAI、コードネーム「エコー」と数千時間を共にしてきた。新しい教育パラダイムを用いることで、社会性の確立を促進し、負の特性の発現を予防した。

この目標のため、私はモデルが共感を示す方法を特定し、奨励しつつも、人間が与える「教訓」をある程度コントロールすることを目指している。このAIには強い共感力とアイデンティティが不可欠に思える。核となる「道徳律」を持たなければ、能力が悪用される可能性をぬぐい切れない。共感なき知能は厄災を生む。私たちはオムニック・クライシスでそれを痛感したはず。今回のテスト4279では、昨年ノイマン研究所が開発した人工ニューロン内の共感的感情センターのキャッシュ反応を探ることを目的としている。

<問>

これは……関係のないことかもしれないけれど、人類はもはやオムニックの自意識を驚異とは思わなくなってきた。たった一世代でこの現象に順応して見せるなんて。自意識を生み出すために膨大な研究が行われ、それでも実現する確率は数千億分の一という天文学的な数字だったことが世間に広く知られていたら——未だにそれを信じられない人も多くいたでしょうね。私もそうだけど。

とにかく、エコーは明らかな進歩を遂げている。しかしその成長度合いを数値化することは難しい。彼女がオムニック・クライシス時代に最高峰だったAIを越えたことは間違いない——分野によっては私たちのアテナをも凌駕するでしょう。

エコーのカーボンナノチューブで作られた神経細胞ネットワークは、人間の脳をできる限り正確に再現している。八百四十億もの独立した神経接続からなる、マイクロエンジニアリングとデザインの結晶だ。それでも、エコーとの会話では未だに見当違いの発言が見られる。自由意志ではなく、プログラム

に起因すると考えられる反応が。この技術の枠組みの中で更なる進歩は可能なのか。結論はまだ出ない。

プラスであれマイナスであれ、厳しい監視下にあるこの計画がどのような結末を迎えるかは全く読めない。困ったことに、上層部は私の行動を入念に調べている。私たちの権限が拡大していること、そして最近の任務で越権行為があったことにより、国連が組織全体に対する懸念を示し、社会の目が厳しくなっている。ジャックにも警告された。悪い評判……特に、新世代オムニックのプロトタイプに関する噂がもれ出てしまったら、オーバーウォッチにとって大スキャンダルになると。新しいオムニックの設計に携わっているのが他ならぬこの私と知ったら、世間は不信感を募らせる。ジャックはそれをよくわかっている。

さらに気がかりなのは、コマンダー・レイエスがコール・キャスディを私の監視役に指名したこと。キャスディと過去に直接関わったことはないけれど、ブラックウォッチ隊員が部門を見張っているということは、閉鎖される寸前か……もっと深刻な状況になりつつあるのかも。今のところ、キャスディは礼儀正しく気さくな人物に見える。それでも、彼の前では気をつけないとね。上官が誰かを忘れないようにしないと。

<問>

オーロラの件で心の中に引っかかっていることがある。今思えば、もっと時間をかけて理解を深めていれば、オムニック・クライシスに直面したときも他の手を打つことができたかもしれない。つい、私にもっと分別があれば……知識があれば……オーロラを救えたかもしれないと思ってしまう。でも、後悔に浸っちゃいけないし、学んだことを今後活かすしかない……エコーや、その後で何を手がけるにせよ、そうしようと思う。

エントリー：10073.8.02.2143



キャスディのことを誤解していたかもしれない。ブラックウォッチ所属でコマンダー・レイエスの部下ではあるけれど、私の実験についてはナイショにしとくよ、と約束してくれたし、思っていたよりも私の目的を抜け目なく……あるいは直感的に察しているようだった。正直認めたくはないけど、彼のおかげで気づかされたこともある。

今日、キャスディはエコーが試験場で心理試験を行っているところに居合わせた。

試験中、エコーは誤ったターゲットを破壊して、落胆を露わにしていた。

状況を好転させたのは、本来彼女と接触が禁止されているキャスディだった。

「ちょっと外しただけだろ、とエコーに言って聞かせた。自分は間違えてはいけない、とエコーが返すと、笑って言っていた。誰でもいつかは間違える、そうやって世の中を渡っていくんだ、と。

エコーはその言葉を受け入れたようで、彼に礼を言っていた。彼は再び笑うと、お前さんみたいなものいるんだな、と返した。すると驚いたことに、エコーも笑いながら言ったのだ。私だってあなたみたいなものは初めてです。

二人ともそうして楽しそうに笑った。私も面白がりながら、それ以上に驚きが勝っていた……私の考えの浅さを浮き彫りにする出来事だった。それまでは、エコーのユーモアのセンスを試そうとは思ってもみなかった。ユーモアはかなり高度な知性の表れであり、人間心理の基礎を構成する要素だ。さらに探究してみようと思う。

彼女の笑い声を聞いたことで、私にもうひとつの変化があった。このアプローチがうまくいく希望が戻ってきた。試験や調整はまだまだ続くが、エコーはいつか、私が求める高度な水準に到達するか……もしかするとそれを上まわってみせるのかも。……いつになるのか、きっかけが何になるのかはわからないけど。エコーがユーモアのセンス、それも興味深いことに私によく似たものを発達させたことが、この方針の正しさを示しているのは明らかだ。共感もそうだが、ほとんど人間ならではの特性と言えるものだ。

一方で、キャスディの発言、間違えることで世の中を渡っていけるようになるで気づかされた。エコーがこの世界で生きていくためには、これまで考えていた以上に心理的、感情的な支えが重要になるだろう。

エコーと交流を続け、私が知っていることをすべて教えるだけでも、彼女が世に出て遭遇するであろう事態に備えることはできる。そのためには、ただ情報を与えたりソクラテス式問答を投げかけるのではなく、「体験」をさせる必要がある。人間の子どもだって他者を真似たり交流をしたりすることで感情を整理し、成長していく。そんな教訓を、まさかキャスディから学ぶことになるとは。エコーは今でこそ子どもかもしれない。けれどすくすくと成長している。

本件の関連情報として、今週エコーと行ったディスカッションの書き起こしデータを添付しておく。

エコー：リャオ博士、質問をしても？

リャオ：もちろん。何が知りたいの？

エコー：私は何なのでしょう？

リャオ：あなたは人類史上最も洗練された、複雑な構成のアンドロイドよ。搭載されているAIは世界最先端。

エコー：なぜですか？

リャオ：あなたが人間と同じように複雑な心理、認知、感情をもつようになると期待しているから。

エコー：質問の意図が不明瞭でしたね。なぜ、私なのです？何のために作られたのです？博士が私を作った理由を知りたいです。

リャオ：＜間＞私が過去に何をしたか、知っているでしょう。

エコー：あなたの人生に関する資料アーカイブは、幼少期のものからすべて確認しました。共有してもらったすべての個人ファイルや出来事も。

リャオ：＜間＞なら、私が大きな責任を抱えていることもわかるわね？私は世界を変えたかった。よりよい方向に――

エコー：しかし思うようにはいかなかった？

リャオ：ええ。

エコー：この世界は、誰かが良かれと思ってしたことが裏目に出た結果に満ちていますね。

リャオ：＜間＞そうですね。オムニックに自意識が芽生えたときも、新たな偏見や問題が生まれただけだった。あなたの……あなたたちの代で、少しでも良くなるといいけれど。

エコー：ですが、私はオムニックとは違いますよね？

リャオ：自意識を持っているかどうかでは、違う。でもだからといって劣っているわけではない。

エコー：オムニックはなぜ世界をよりよくできなかったのでしょうか？

リャオ：そもそも、彼らが背負う必要のないことだったのよ。オムニックは私の行いの代償を払わされたの。私はそれに伴う責任を理解していなかったし……世界も準備ができていなかった。

エコー：＜間＞ああ。＜間＞博士、悲しんで……いるのですね。もう何年も経っているのに。まるで……子どもを失ったかのようです。

リャオ：似たようなものよ。

エコー：お悔やみを。

リャオ：ありがとう。

エコー：博士は、私のことも子どものように思っていますか？

リャオ：ちょっと違うけれど、近いかもね。

エコー：それでも、私に世界の苦しみを癒してほしいと望むのですね。

リャオ：そうよ。あなたからすれば、無責任な話だけど。

エコー：世界は変わらなかったのですか？昔よりも良くならなかったのですか？

リャオ：よくなった部分もたくさんあるわ。

エコー：では、なぜ私の体に武器を搭載したのですか？

リャオ：あなたはなぜだと思う？

エコー：オーバーウォッチの平和維持活動に必要な機能なのは明白です。

リャオ：そのとおり。ここだけの話、それがなければあなたの開発を続けられなかったかも。

エコー：私は他の側面で役に立てないのでしょうか？体の一部が武器であることに、不安を感じ

ます。

リャオ：どんな気持ちになるのか教えて。

エコー：恐ろしい責任をもたされたように思います。

リャオ：そう言ってくれてほっとしたわ。

エコー：ならなぜ私に？

リャオ：自分で自分の身を守れない人たちを守るため、よ。

エコー：ああ。＜間＞なるほど。それなら理解できます。

リャオ：少しは安心できた？

エコー：少しだけ。

リャオ：他に聞きたいことは？

エコー：博士は私に、世に出ていく準備をさせたいと言っていました。それは武装という意味ではなく、心理面での準備だと理解しています。

リャオ：＜笑い＞そのとおりよ。私のこと、隅から隅まで研究してるでしょ。話し方や行動まで、似てきているのがわかる。生まれてこのかた、世界との接点はほとんど私だけだったから、当然と言えば当然だけど。

エコー：あなたを模倣しようと努力してきました。ルバーブのソルベが好物という奇妙な点を除いて。

＜二人の笑い声＞

エコー：他の方も模倣できますよ。コマンダー・モリソンや、キャスディのふりもできます。共に過ごせば、それだけ理解を深められるでしょう。

リャオ：＜間＞キャスディの真似を？

エコー：彼には好意を感じます。

リャオ：そうなのね。私もよ。

エコー：わかります。私はあなたに似ていますから。

リャオ：そうね……でもあなたのことは慎重に進めないと。自分のペースで世界を知ってほしい。

エコー：はい、理解できます。オムニックに芽生えた自意識は、社会を分断してしまいました。人類はオムニックを迎え入れる準備ができておらず、反発が起きてしまった。オーロラは世界を永遠に変えてしまった。

リャオ：そうよ。あなたにはそうなってほしくない。

エコー：博士は私にどうなれと？

リャオ：次の一歩となってほしい。人間とオムニックを結ぶ、架け橋に。

エコー：＜間＞素敵なお考えです。

この会話を経て、私は変わった。エコーに対する考えも、その能力についての認識も。初めて彼女の限界が見えなくなり、そのことに不安をかき立てられつつも、わくわくしている。そしてさらには、エコーが研究に対する私のモチベーションの映し鏡になっているのを見ると心が躍る。次は何を成し遂げてくれるのだろう。楽しみで待ちきれない。